

筆山

第39号 / 2005年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲 (41回)

編集室：〒106-0032 港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 編集委員 鶴和千秋 (41回)

TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201 E-mail:tsuruwa@rsg.gr.jp

関東支部ホームページ：<http://www.tosako-kanto.org/>



秋の一日、関東支部の女性中心の懇親会「はちきん会」が久しぶりに開催されました。(関連記事は13ページ)

心からの感謝

33回生 佐々木泰子

私の人生はこれまで！いきなり末期近くまでガンが進行していると告げられた。それは2年前の正月明け。私の大切な娘3人にも会えなくなってしまうのか。それが一番悲しかった。気力のあるうちに、遠くにいる娘たちに無性に会いたかった。熊本に嫁いでいる長女、彩乃は出産前。しかし、大きなお腹を抱えて帰ってきてくれ、出産ぎりぎりまで入院した私の傍にいてくれた。米国留学中だった双子の二女(珠乃)と三女(梨乃)も、私の病気を知った二日後には帰国し、励ましの言葉をかけてくれた。

手術は8時間に及び、その後の抗がん剤治療の辛かったこと。双子の娘たちは、勉強してきた声楽の成果を示そうと、癒しのCDを作成。「このCDを私たちの母にささげます」の言葉に涙が溢れた。沈みがちな私の心は、これを聴く度に、慰め癒された。長女も無事に出産、元氣いっぱい初孫の男の子を私に与えてくれた。これらにどれだけ感謝し、心を癒されたか言葉に言い尽くすことは出来ない。このように優しい娘達に育ってくれたことを、私は心から幸せに思い、愛を注ぎ、慈しみ育ててよかったと思った。

さらに私を支え元気にしてくれたのは、娘達ばかりではなかった。主人や姉、高知にいる兄弟、多くの友人知人たちから数え切れぬほどの励ましや助言がよせられ、感謝・感激の日々が続いた。人々の優しさが心に沁み、再び生きようとする気力を与えてくれた。

特に土佐高の同窓生、先輩、後輩の方々から頂いたご恩は決して忘れません。この場を借りて、心から皆様にご感謝と御礼を申し上げます。本当に本当にありがとうございます。これからもいのちあるかぎり、感謝を忘れず皆様のご多幸を祈り、一日一日を大切に過ごしてまいります。今後ともどうかよろしくお願ひ申し上げます。生きていくってすばらしい！

関東支部活動報告

事務局長 金澤由里 (55回生)

今年も終りに近づきました。総会担当学年ということもあり、10歳違いの先輩後輩の皆様や、同級生と、公式に非公式に会う機会が多かった年でした。来年は二〇〇六年にちなんで、末尾6がつく回生の交流が活発になることと拝察しております。

総会は、二〇〇六年6月10日(土)に霞ヶ関ビル33階にあります東海大学校友会館で開催する予定です。日本初の超高層ビルにおいて、歴史に思いを馳せ、未来を眺めながら、旧交を温め、親睦を深めていただけたことと思っております。

なお、二〇〇六年2月18日(土)16時から同会場において、総会幹事学年の新旧引継ぎ、顔合わせなどを行います。ご出席をお待ちしております。一九九七年から始めた総会幹事の担当学年制も来年で節目を迎えます。来年は役員改選の年でもありますし、記念すべき1年でありますように

と願っております。

遡って、今年後半の関東支部の活動を報告致します。二〇〇五年7月2日(土)香川

支部総会に市川幹事長が出席しました。7月5日には、関東支部ホームページが7周年を迎えました。8月13日(土)母校ホームカミングデーに、泉谷支部長、市川幹事長、二宮副幹事長が出席しました。

10月27日(木)には、第12回はちきん会が八芳園で開催されました。美しい庭園を持つ会場に美しい男女が現れ、品の良い同窓会でした。特別ゲストの「たまりの」の澄んだ歌声に、遠方よりの池上校長、古谷先生も涙されたとか。また、11月12日(土)広島支部総会に山中副幹事長が出席しました。

最後になりますが、皆様どうぞ良いお年をお迎え下さい。来年もよろしくお願い致します。

母校だより

学校長 池上武雄 (28回生)

関東支部の皆様にはますますご清勝のこととお慶び申し上げます。いつも母校に熱い

思いを寄せ格別の御支援を賜わっておりますことを有難く御礼申しあげます。

○寄附行為の改正について

私学法改正に伴う本校寄附行為(株式会社)の定款に相当の改正につきましては数々の紆余曲折を経て8月25日の理事会で改正案が承認され、9月6日付で高知県知事の認可を受けることができました。校長の辞任表明など一連の混乱は一重に校長たる私の不徳の致すところで、皆様にご心配をお掛けしましたことを深くお詫び申しあげます。

川崎理事長はじめ多くの皆様の深いご理解と力強いご支援があったればこそと心から感謝申しあげております。

今後は新しいルールに則って円滑な学校運営に誠心誠意努めて参ります。

○学校行事・部活動について

インターハイには剣道部、登山部、陸上競技(リレー)などの団体出場のほか、バドミントンほか5種目の個人競技にも出場し健闘しました。

特に登山部(男子4名)は全国第5位に見事入賞を果たしました。また文化部でも数々の全国大会出場がありました。が、とりわけ文部科学大臣杯

小中囲碁団体戦で土佐中チーム3名(中3男、中2男、中1女)は対局態度や前後の立ち居振る舞いを高く評価され、「フェアプレイ賞」を受章しました。品位を重んじる本校の生徒として誠に喜ばしい限りであります。

9月23日、大運動会が開催されました。快晴の天候のもと大勢の保護者、ご家族の方々や市民の皆様の大声援をいただき、恒例の6基の檣、ホームゲーム、チアガールを加えての応援合戦などを交えて、例年に勝るとも劣らない盛り上がり振りでした。

○新校舎建築計画検討委員会が発足

かねてより校舎建築場所の決定方検討をお願いした安岡正人委員長(29回生)を中心とする委員会から9月8日、「校舎建設場所は現在地(塩屋崎)が最適である」との答申をいただき、これを受けて10月11日、振興会、同窓会、教員代表4名からなる委員会(岡村甫委員長32回生)を立ち上げていただきました。今後の校舎改築についての具体案(校舎の規模・内容とコンセプト、資金関係、建替え方式と地震対策、設計体制など)

本部だより

幹事長 安岡範悦 (39回生)

関東支部の皆様には常日頃、新しい企画に取り組まれ、まさに同窓会の牽引力として活躍していただき厚くお礼を申し上げます。

私達本部役員も皆さんに見習い、幾つかの改革に取り組んでまいりました。

一つは同窓会総会の母校での開催です。級友・恩師との親睦、及び卒業生同士の交流を図ってもらうことでより一層「愛校心・土佐高魂」を育んでもらい、卒業生と母校との連携の構築、強化をはかりたいと考えました。おかげさ

をできるだけ短期間にまとめたいただき、評議員会、理事会にお諮りしたいと考えております。また併行して長浜グランド(高校野球、サッカー練習場)の造成計画も進めておりますので、次回の会報では相当具体的なご報告ができるものと思っております。

寒さに向う折柄皆様のご健康、ご活躍を祈念申しあげ、報告とさせていただきます。(11月立冬)

まで、昨年・本年とも四〇〇名を超す老若男女の同窓生に参加していただきました。将来の後輩となるであろう小さな子供さんの参加や「母校と教え子との絆を更に深める最高の企画だ」との恩師の言葉には胸熱くなるのを感じました。

二つ目は会報誌「向陽」の作成です。従来は発送経費も考慮し総会案内時に、高知県在住者を対象に送付していましたが、総会での討議された事や役員改選などの記事は1年前の内容となっていましたが出来ただけリアルタイムに同窓生全員に配布する事としました。

三つ目は名簿の管理と経費削減です。従来は業者の方に管理・発送をお願いしていましたがパソコン導入を機に事務局で管理をする事としました。現在名簿発行の作業真っ只中ですが、調査資料に基づく変更作業、膨大な原稿のチェック作業、会報誌や総会案内状等の発送作業は事務局を預かる千頭会計幹事、北村副会長、西山副幹事長を中心とした手作業で対応していますので大変です。そこで振興会の皆さんや、在校幹事の先生方、役

員のご家族にも多大なご協力を頂いています。発送方法にも工夫を凝らすなど経費削減への小さな努力もまた続いています。この小さな努力の輪が支部役員の方々のご協力を得て同窓会の連携の輪につながる事を期待しています。

名簿申し込み受付中!!

(限定部数発行 五〇〇〇円)
専用振込用紙をなくされた方は、郵便局の振込用紙に
〇一六四〇一七―四九一〇八
加入者名

土佐中・高等学校同窓会
氏名、回生、ホームを明記、
備考欄には同窓会名簿希望と
お書き下さい。

北海道支部だより

幹事長 窪田秀忠(38回生)

関東地区の皆様こんにちは。只今懐かしくそこに居るような気がして「はちきん会」を拜メールしていました。それにしても「花の三八」と言われた38回が永野さんだけとはいささか寂しいものがあります。こちらは昨年の今日(10月28日)は雪が降りゴルフが出来ませんでした。今年はい

い天気ですがゴルフは仕事で出来ません。

昨年の秋に発足しました、北の大地、世界遺産知床のある北海道支部はその後の活動としては幹事が5〜6名集まり、ジンギスカン、ビヤガーデン、蟹、新鮮な魚介類を囲んでの宴会で親睦を深めています。(ほとんど私がしゃべっています。)

今回はこの美味しいものが一杯の魅力に溢れた北海道支部が如何にして出来たか、物語ってみます。

平成15年9月×日、37回の浜田さんが社長を務める「ホテルニュー神田」は札幌に栄転の私の送別会で、さしもの広い1階ホールも、人、人、人で埋まっておりました。気を良くした私は、生来の単純、オッチョコチョイさで、長々とお礼の挨拶をした後の締めくくりに「私が北海道に参りましたからには、北海道支部を創ります。」と挨拶をしてしまいました。場内は割れんばかりの大歓声でした。

札幌に参りますと、栄転の身はなかなか忙しく「酒とシゴト」の日々で、おまけになかなか同窓生が見つからず、同窓会支部設立の進展は全く

ありませんでした。内地からいただくメール、手紙では最後に明るく、北海道支部はどうナツチヨリマスカ?との問い合わせも日増しに多くなってきました。このままでは「狼おじさん」になると焦りつつあった私は、4月のある朝、北海道新聞の一面にシリーズで掲載中のYOSAKOIソーラン有力チーム紹介欄で、真っ赤なふんどしで踊る「北大チーム縁」の写真に目を留めました。このふんどしから、高知大南稜寮、三鷹の土佐寮のふんどし裸踊りを連想した私は、この踊りの仕掛け人はキツ高知出身の北大生で、しかも土佐高に違いないと思

て手を貸して欲しい旨お願いしたところ快諾を得、YOSAKOIソーランの終了後、すすきの交差点で会うことになりました。

い、記事を読んでいくと、紛れも無く、恥ずかしがる皆を説き伏せ、赤ふんを採用したのは高知出身の大崎博士さん(現YOSAKOIソーラン事務局勤務)と有りました。それから早速大崎さんに電話し「新聞を見せて貰いましたが、大崎さんはもしかしたら土佐高出身ではないでしょうか?」と尋ねた所、「そうですね。70回生です。」という返事が返って来ました。そこで私の同窓会一筋20年の話をし、是非北海道支部を創りたいの

大崎さんと面識の無い私は、土佐高の甲子園に出場した時の団扇を持ち、待ち合わせました。その時大崎さんは美しい女性と一緒に見られました。彼女が現広報担当の有岡さんで、土佐高の78回生で北大チームに所属していました。しかも彼女のお家は、野市の私の家と直線で三百メートル位の距離と言う奇遇でした。又、大崎さんも70回小松岳志さんの親友でした。世の中は本当に狭いものだ、広い北海道で妙に感心しました。その夜は、すすき野一心(中島紹介の店)で、北海道支部設立を私が熱っぽく語りまくり、大崎、有岡さんも強く賛同していただき、その後夜の会合を重ね、3人で力を合わせ、待望の北海道支部設立に漕ぎ着けました。

大崎さんには事務局長をお願いし、活躍していただくとともに、浅井さんの提案で、ガーナにYOSAKOIソーランチームを派遣して貰い、ガーナ、高知、北海道の土佐

高パワーでガーナよさこいを大いに盛り上げようと言う事になり、その一歩手前まで行きましたが、大崎さんが急遽設立総会の直前神戸に行く事になり、実現しませんでした。

しかしながら、北海道支部には北海道新聞編集委員の先川さん(45回)やYOSAKOIソーランの設立にかかわった現事務局長川竹さん(63回)も居るので、何とか浅井ご夫妻のご期待に添えるよう支部として貢献したいと思っております。尚、支部長の北大農学部教授田原さんの教室にはガーナからの留学生が活躍しています。

来年の北海道支部の総会は皆様方より、札幌市内で無く、北海道らしい所でのご希望が多く、80年の歴史を誇る名湯天然露天風呂 丸駒温泉の一軒宿で、秋の支笏湖畔の雄大な紅葉と温泉を心行くまでお楽しみいただきたいと準備いたしております。たくさんのご参加をお待ちしております。講演は、当社ごとでは有りますが、23年にわたり海外の難民キャンプに直接出向き視力検査の上、10万個の眼鏡を難民に寄贈し続け、この度、第1回朝日企業市民賞、及び

UNHCR特別賞を受賞しました富士メガネ海外難民眼鏡寄贈プロジェクトを、私の講師で紹介させていただきまます。ご期待ください。

東海支部だより

幹事長 村山文世(41回生)

ごぶさたいたしております。東海支部の皆様、こんにちは。まずは、東海地方の近況をお知らせいたします。3月25日から9月25日まで百八日間におわたって開催された愛・地球博(愛知万博)が無事終わりました。当初の入場者数千五百万人の予定が、終わってみれば大方の予想を裏切り、二千二百万人と大盛況でした。愛知・名古屋の元気を、日本全国、世界中に発信できました。東海支部でも既に「ご存知とは思いますが、ホームページに山崎幹事が万博情報を「幹事のつづきやき帖」に逐次掲載して、支部会員始め愛読者には非常に役立つというお声を数多く寄せていただきました。その後も東海地方では、各方面でこの万博のテーマ「環境」に関して活発な取り組みがなされており、今後

に大なる財産になることと思えます。又、万博に先立って開港したセントレア(中部国際空港)も相変わらず盛況が続いており、その名称もすっかりと定着しております。名古屋の町並みもリニューアルして大変活気づいております。ただ残念なことは、地元中日ドラゴンズが最後に関西の雄、阪神タイガースに優勝を譲り、2連覇は達成できませんでした。来年には東の雄、読売ジャイアンツと共に、三つ巴の熱い戦いを期待しています。さて、東海支部では、5月の支部総会(来年も5月20日に同じ会場で開催の予定を致しております。)も終わり、残すところ今年の行事は、年末の懇親会のみとなりました。現在幹事を中心に準備に取り掛かっております。

また、9月21付けで約9年、東海地方では、中部高知県人会でも活躍され、その輝く美声をほこっていた、天造副幹事長(52回生)が山形に「転になり一同ショックをうけ、暮の支部懇親会の宴会では寂しさのあまり声が出ないのではないかと心配しております。が、チームワークで乗り切りたいと思えます。東海支部の

活動の悩みの種は、転勤で異動する人が多く、又学生を含む新人の登録も少なく、なかなか会員の増加が望みませんが、財政事情も厳しい中ではあります。何とか地道に活動を維持していきたいと考えております。

最後に東海支部の皆様のご健勝と、益々のご発展を祈念して支部だよりとさせて頂きまします。追伸。

天造君の名物エールの写真を添付いたします。



関西支部だより

『つたのからまるチャペルの後』

支部長 川崎美幸子(42回生)
10月はじめの土曜日、一ヶ月前に届いた案内状に従って、初めての土地に旅をした。何の用事かと訪ねられたら「土佐高の自営会執行部の同窓会」という「何それ?」と言われるような理由である。しかも届いた案内状には埼玉県川越駅に集合とあるだけで、時間も書いていない。これで成功するのだろうか?と思いつつながら夕刻合流するホテルに向った。

昭和41年卒業生と一部私のように42年卒の数名からなるメンバーで、その時代と言え、春の選抜で高校野球準優勝したことが、確か41年卒はベビーブームのピークであるにもかかわらず、土佐高の東大入学もたぶんピークであったこと、と言え記憶に残る方もいらつしやるだろうか?我々の執行部はそのなかで、向陽会費を値上げしたあまり皆さんにはありがたくない執行部かもしれない。

40歳代で、今で言う過労死であろうか急逝したA氏の墓参から始まって、以来2年から4年に一回、全国を転々と、単に宴会旅行と言えればそれまでだが、12人ほどのメンバーなのに8〜9人は集まるとい

う出席率のよさは、お互いに「この求心力はなんなんだろう？」と言わせる結束力の強さである。

おもえば高校時代から不思議なグループであった。誰かの発案で、放課後の教室に残された牛乳瓶をかたづけたり、「人形の家」のノラについて激論をたたかわせたり、あげく春休みの朝、高知城の掃除に行つて失業対策で働いている人に文句を言われたことがある。鼻持ちならない健全さだと思つていた同窓生も居たとあとで知つた。

ただのおばさんたちを、忙しい医学部の教授がアツシー君になつて出迎える、アフリカの飢餓について朝まで生テレビ状態だったのに、飲みすぎて翌朝全然覚えてなかつたりした。

今回も心づくしの料理にあふれる地酒で盛り上がったあとは、闘病のメンバーを翌日はお見舞いすることに全員一致。二次会はお決まりの青い山脈と学生時代、もてなす上尾のママはちよつと東京、大阪あたりでは今時、ないだろうというパワフルさであつた。司馬遼太郎氏によれば高知県人は議論で酒が飲めるそうで

ある。皆さんも試してみられては？二年後は本拠、高知での開催である。

広島支部だより

支部長 沖 修一 (40回生)

関東支部の皆様今日は！

今年の広島は台風も少なく、寒さの到来も遅く、秋たけなわの毎日です。瀬戸内の温かな気候が仇になつたのか、名産の松茸も今年是不作のようで、ますます庶民の口には入りません。

広島支部もこの11月12日に支部総会を行い土佐高、同窓会本部、関東支部からは山中和正副幹事長(24回生)を始め各支部からのご来賓の方々にも御参加をいただき盛会の内に終わりました。今回は京都大学総長尾池和夫教授(34回生)に「地震を知つて震災に備える」という演題で御講演を賜りました。難解な地震の話分开りやすく、面白く話していただきました。また同窓会員の御子息(中学生)の聴講希望もあり、中学生にとつては京都大学総長というお立場の大学教授の講義は初めてであつたと思われま

講演の前に総長先生より色紙をいただいたこの御子息にとっては感激もひとしおであつたことでしょう。御夫妻で御来

広いただきました尾池教授・奥様(尾池葉子様、34回生)には広島支部会員一同深く感謝致します。本当に有難うございました。

山中和正関東支部副幹事長からは、彼が大学に合格して上京した際に当時司法修習生であつた竹村照雄先生をある弁護士事務所で紹介されたエピソードをご披露いただきました。

また東京から御夫妻で駆けつけていただきました竹村照雄先生(20回生)、元広島高検検事長もお元氣な姿を見せていただきました。竹村先生は今年の土佐高で行われたホームカミングデーに東京から高速夜行バスで往復された経験を話されました。前日夜行バスで東京を出発され、当日高知着でホームカミングデーに出席された後、その日の内に夜行バスで東京へ帰られたそうです。いわゆる0泊3日の弾丸ツアーです。竹村先生は御高齢のこともあり、かなりきつかったとのことでした。私事で強縮ですが、今年

なぜか仕事で東京へ行く機会が多く、それもぎりぎりのスケジュールでの移動が多くて少し疲れれます。広島から東京への往復は、航空機、新幹線が主な手段ですが、スケジュールの関係で初めて高速夜行バスを利用してみました。

終日仕事の後、夜、広島を出発し、翌朝東京着、その日は終日東京にて仕事をし、その日の夜東京発、翌朝広島着、終日仕事というスケジュールでした。これもまた弾丸ツアーです。

実際に乗ってみると座席は両側の窓沿いに1列ずつ、中央部に1列の3列に並んでおり、それぞれが独立していました。座席の背もたれもほぼ水平になる所まで倒すことができるようになっていました。

毛布が1枚支給され、トイレ、コーヒール、お茶、水付きでした。残念なことは午後10時すぎると強制的に

窓のカーテンが閉められ、高速道路越しに見る夜景が見えなくなつてしまうことです。



土佐高時代に山岳部で三嶺、剣山、工石山、白髪山、横倉山、黒森山、石鎚山、瓶ヶ森、中津明神山などでテントを張り、河原や小石の上に寝て、どこでも寝られるように鍛えたのは昔のことであり、本当に寝られるものか心配してしまいました。しかし往復とも午後11頃から午前6時頃までの記憶がないことを考えますと、結構あの狭い座席で眠っていたと思います。利用する人たちも若者が多いと思いきや、意外と年配の方も利用しており、航空機や新幹線に比べて時間を有効に使えること、魅力的な料金設定であることが理由の一つであろうと推定されました。しかし正直言っても疲れました。

印刷された帝国海軍五省を発見し、思わず声を出して読んだ時の感慨、江田島に渡り海辺に屹立する旧海軍兵学校を見学し、資料館で見る端然として凛々しい顔立ちの兵学校出身者の写真と、読むほどに霞んでしまい、ついには最後まで読むことのできない遺書に接したときの感動……。

広島の旅行は思い出や心に残るといふ以上に魂に訴える何かがあります。

関東支部の皆様、広島にも沢山の土佐高出身者がいます。交通機関も夜行バスだけではなく、新幹線、航空機で手軽にくることが出来ます。関東支部の皆様も是非広島へ立ち寄って、旧交を暖めようではありませんか。

香川支部だより

「香川県さぬきうどん全店制 覇」

幹事 萩野友康(44回生)

高松のうどん王のおんちゃんです。平成12年1月に高松へ赴任して以来、香川県のうどん店全店制覇(八九三店)を5年と7ヶ月で達成しました。長い長い道のりでした、

ある時は一日に朝昼晩全てうどんで6店目には胃が拒絶反応を示し味が分からなくなり、ただ流し込むだけでした。探して探して行った店が閉店やおいしくないなどはがっかりものでした。小豆島(15店)には苦戦の連続でした。なんと言っても都立5回フェリー代は高つくきました。田んぼの中での立ち食いのうまい店や海がきれいな店、讃岐富士がすばらしい店などうどんの味を倍増してくれました。

また、詫間の沖栗島に行く渡船はのんびりと瀬戸内の海を堪能でき感動しました。以上のほかにもいろんな思い出がありました。

香川県のうどん店の簡単な紹介をさせていただきます。ここでいううどん店はうどんを主体として麺作りから行っている飲食店です。現在営業中のうどん店は八三四店前後です。制覇八九三店の内、閉店が59店となっています。営業形態の区分は一般店タイプ(お店の人が席まで運んでくれる店)、セルフ店タイプ(うどんを自分で運ぶ店、全体の50%)、製麺所タイプ(製麺を主にしている店)に分かれています。営業時間帯は10時〜14時が90

%の昼型、休みは日曜日が26%、無休が30%。価格はかけ一玉でセルフ店が百六十円、一般店二百六十円となっています。

全店制覇を思い立ったきっかけですが、平成12年の赴任当時はさぬきうどんブームの走りの時でした。キリンビールが企画した「さぬきうどん巡礼八十八箇所」の巡礼表を偶然手に入れ数店行ったところこれがうまいのなんのって絶品でした。そして決定的だったのが地元の本屋で「さぬきうどん全店制覇攻略本」がまたまた偶然にも目に入り、手

に取ってしまったことでした。むくむくと挑戦モードに突入するの時間は不要でした。あるわが社の会で公言(他にゴルフ/シングルと八十八箇所巡りの三点)したところ、大半の者が薄ら笑いでした。やってやろうではないか、「おれをなめたらあかんぜよ。火がついたらとことんやる男ぜよ」。それから攻略本片手にせつせと昼はもちろんうどん、朝もうどん屋を探し放浪の旅を続けてまいりました。

車での高知出張時などは行き帰りに途中で高速を降りての食べ歩きを行い、休日は4店以上がノルマでした。平日の昼食はもちろんかけうどんです。胃の調子のいい時は3店回りました。

関東支部の皆様も、高知に帰省の際には、是非ともほんもの讃岐うどんを食べに、高松にお立ち寄りください。最後になりましたが、皆さまの今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

お悔やみ申し上げます

- 12回 浦田 久 H17・6・14
- 14回 畠中達夫 H17・6・5
- 16回 油井益雄 H17・3・16
- 23回 中澤 浩 H17・1・4



香川支部総会は毎年七夕の日に関催される

ふるさとへの手紙 (六)

早稲田大学三年 小松 香菜 (78回生)



左側が筆者

上京して、早3年目。時が経つのは本当に速い。東京での大学生活は華やかで楽しいものであると同時に、一人でもやっていると寂しくなってしまう。寂しさが裏には潜んでいるように思う。しかし、心が疲れてしまった時、私には力強い処方箋がある。それは、高校時代一緒に苦楽を共にしたバトミントンのメンバー達である。中でも、休みには高知で必ず会うメンバーが3人いる。みんな違う土地で頑張っているため、会えるのは休みだけだが、会うと次の休みまで会わなくても大丈夫なほどエネルギーがチャージできるのだ。しかしながら、負けん気一杯のはちきん娘がよく同じ学年の同じ部活で出会ったものである。当時はこの辛くて長い練習は永遠ではないかというような気がしていた

が、終わってしまったと辛かったことは意外とあまり覚えていないもので、楽しかったことの方が記憶に残っているのが不思議である。今考えれば当然のことのように思うのだが、当時は男子と女子の練習内容が違うことに不満を覚え、私たちの学年の女子だけ男子と同じ練習をしたいと抗議し、また、男子との練習試合も絶対負けまいという精神でぶつかっていた。おかげで私は未だに左足神経や足首に僅かな

がら後遺症が残ってしまった。しかし、このメンバーに恵まれたおかげで素晴らしい結果も残すことができた。この脚の痛みも一種の勲章と想っている。おそらく土佐校のバト

ミントン部で中1から高3の四国大会が終わるまでやり通したという事実は一生の誇りとなり、自信となると思う。本当に素敵な思い出だ。



オックスフォード留学時の写真。最後列左から5人目。

こんな思い出に浸りながらも現実は厳しく、大学3年のこの時期になると嫌でも耳にするのが就職活動だ。先程述べた3人より、最も早く社会に出る予定なのがこの私なのだ。2人はまだ2年生、1人は中国に留学中。みんなの中で、一番メンタル面が弱かった私が誰よりも早く就職することに「大丈夫かえ」とメンバーはみな心配している。「大丈夫ちや〜」なんて言いながら頭の中は不安と焦りでいっぱいなのが正直のところ。けれど、去年イギリスに短期留学していた経験や、やりたい仕事に繋がる今のアルバイトを通して、自分なりに奮闘して道を定めているつもりだ。土佐校のはちきん代表として、負けん気いっぱい、元氣いっぱい頑張りついで、元氣の限界を超えそうになったら、また仲間と連絡を取って「土佐弁」でいっぱい、いっぱい話せばいい。こんなふうに「土佐弁」と「標準語」のバイリンガルを一生続けていくことができたら幸せである。

【母校及び同窓会本部・各支部一覧表】

- 土佐中学・高等学校 事務局 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10 (TEL) 088-833-4394 (FAX) 088-833-7373 (E-mail) tosa@tosa.ed.jp (HP) http://www.tosa.ed.jp/index.html
- 土佐中学・高等学校同窓会本部 会計幹事 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10 (TEL) 088-833-4394 (FAX) 088-833-7373 (E-mail) tosa@tosa.ed.jp (HP) http://www.tosaobog.com/
- 土佐中学・高等学校同窓会北海道支部 事務局長代行 島村昭範 (TEL) (FAX) (E-mail) shima49n@yahoo.co.jp
- 土佐中学・高等学校同窓会香川支部 事務局長 武山正人 (担当: 大石浩) 〒761-0113 高松市市島西町1850-1 四国電力(株) (TEL) 070-5750-2120 (FAX) 087-841-7809 (E-mail) ooishi11737@yonden.co.jp
- 土佐中学・高等学校同窓会広島支部 事務局長 山崎迪子 〒732-0062 広島市東区牛田早稲田1-24-7-210 (TEL) 082-227-2656 (FAX) 082-227-2656 (Email) myamazaki@idion.enjoy.ne.jp (HP) http://www.geocities.jp/hiroshimashibu/
- 土佐中学・高等学校同窓会関西支部 事務局長 原田和人 〒530-6001 大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー1F アリコジャパン内 (TEL) 090-1073-7822 (E-mail) harada73@hotmail.com (HP) http://www.tosa-ko.org/kansai/
- 土佐中学・高等学校同窓会東海支部 事務局長 神宮美恵子 〒468-0075 名古屋市天白区御幸山1201 御幸山パークマンション B-301 (TEL) 052-837-5834 (FAX) (E-mail) jjjingu-m@crux.ocn.ne.jp (HP) http://tosakotokai.web.infoseek.co.jp/
- 土佐中学・高等学校同窓会関東支部 事務局長 金澤由里 〒251-0875 藤沢市本藤沢7-3-7 山中和正(24回)気付

ああ、土佐高校

フジムラ・ド・ブラジル(株)
社長

坂本雅 (44回生)

44回生の坂本雅です。中学・高校時代はバスケット部のマネージャーをして「九」というあだ名で呼ばれていました。高知で88年間、藤村製糸(株)として「製糸業」を続けてきましたが、今年大きな決断をして奈半利町の製糸工場を閉鎖して遠くブラジルで働いています。それもこの7月からカネボウシルク現地社員千人を一度に引き受けるといふ交代をして……。

カネボウは報道のとおり、経営不振のまま産業再生機構の支援を受けて会社再建を目指していますが、昨年5月に



カネボウ(株)の中嶋会長(左)は秋野君44回と一緒(右)に日吉の寮にいて、上岡さんに酒も「マジヤン」も習ったという奇縁に驚きました。

海外21事業所から、すべて撤退すると表明しました。その中でブラジルにあった二つの子会社のうちシルク関係のRebo Silk Do Brazilを落札して株式の譲渡をしていたたき、FUJIMURA DO BRASIL S.A という会社になったという経緯です。

この会社のあるコルネリオ・プロコピオ市はサンパウロ州のとなりの「パラナ州」にあり、農業が盛んなところで、サンパウロ市から真西に約五〇〇キロメートルの地点にあり、JAL便のNY経由でサンパウロに着くともう一度飛行機に乗り換えてロンドンリーナ空港から60キロメートルの距離を車で50分ほどで到着です。サンパウロとイグアスの滝とのちょうど中間点にあり、主要幹線道路沿いでサンパウロから車で約6時間で、東京―大阪間の距離です。簡単に説明しましたが、奈半利町からはドア・ツー・ドアで40時間以上かかりますからやはり遠いです。

仕事は生糸・燃糸の製造で、約千五百戸の養蚕農家に蚕種および稚蚕を提供し、出来た繭を州内11の出先を拠点に買付け、それを工場に運んで



乾燥し糸にします。品質の評価は高く、最高水準の価格で取引されていますが、ブラジル国内では2番目の規模で日本の全生産量の2倍以上を作ります。

産業再生機構との交渉過程では、守秘義務契約があり、外部に話が漏れたら破談ですよというものでしたので、蓋を開けたらもうブラジルへ出かけたという形になりましたが、その間、土佐高人脈には大いに助けていただきました。海外の会社を買収するために、まず国際弁護士をお願いするため、39回田村村裕先生(高知)

(東京)を紹介していただきました。結果として北本先生のおかげでこの買収劇はドンデン返しのように成立しましたが、産業再生機構側の弁護士やスタッフとたった1人で

対峙して一歩も引かなかった交渉ぶりは、胸がすくような気分でした。契約成立後相手方から「交渉相手としては一番嫌なタイプ」の先生。でも個人的にはこんな先生に依頼したい。」と言う感想を聞かされました。交渉は深夜に及び東京で個人タクシーをしている同級生の44回川島君にはずいぶんと励まされました。

7月6日水曜日にブラジルに向かって高知空港を出発しましたが、思いがけず土佐林業クラブの皆さん(福田真苗会長43回)に控室まで準備していただき土佐高時代の友人の見送りを受け、空港を飛び立つ際には奈半利町有志の方々による大漁旗が大きく振られているのが機内から見えて思わずジンと来るものがありました。成田空港では、安田町の和田華子さん(A N A勤務70回)に長距離用の席を確保してもらい、と大助かりでした。

ブラジル国の永住ビザを取得するため、この10月に一時帰国をしましたが、バスケット部を皮切りに、44回生や土佐高の先輩方にも席を設けていただき、大変お世話になりました。特にバスケット部O

B会は、池上校長先生が参加してくださり、激励していただいたのには感激しました。

「ブラジルでも池上校長先生が辞表を提出したニュースを高知新聞のHP上で見ていました。」とご報告し、みなで大笑いになりました。

ブラジルでの生活を少しお話しするとホテル住まいからマンションへ8月から移りました。12階建ての10階で眺望は素晴らしいですが、街で音がとて賑やかです。入り口は2ヶ所あり、3ベッドルームに2つのシャワー室というとビックリしそうですが、コマ切れになっていきますので、大きな感じはありません。ただ、スカイパーフェクトTVでNHK衛星放送が見えるのとお手伝いさんがいますので、これは別世界です。送り迎えの車はやめて、通勤は会社のバスが7通り動いていますから、



一番近いバスに乗っています。ただ、いつも同じ時間に同じ停留所から乗るのは避けてくれと言われていますので、時折路線やバス停を変えています。治安が悪いため「何かあると困る」という心配をしているのです。

職場で同室のマリーザは日本語も堪能で、私の通訳兼秘書もしてくれて助かりますがとにかくこちらの女性は「オイ。オイ。」と大きな声で相槌をうちながら電話します。

で、これには驚きましたし、マリーザが日本名をMASAKOというのには思わず笑いました。「まさこ」は家内の名前です。どこへ行っても縁があります。

自分の仕事の中で一番大変なのが「サイン」です。こちらは判子というものがないので、全部自筆でサインです。



SAKAMOTO
TADASHI

これが毎日結構な数になります。最初はポルトガル語の文章は不安でなかなかサイン出来ませんでした。しかし、段々慣れてくると数字を追いかけるようになり、サインのスピードも上がってきました。給料などはサインをする人を委託していますが、販売関係は結局自分がしなければなりません。社内用と販売用を併せると何枚サインしているのかと思うくらいです。

帰りは6時10分前に事務所が終わります。週4時間制で5日間で割っています。日本との違いはフェリアス(30日休暇)が労働者の権利としてあり、会社はこれを拒否できません。ただ、この会社はカネボウさんの薫陶でしょうか、事務所はフェリアスをほとんど取らない人が多いのです。これがブラジルでは良いことばかりでなく、労働裁判のタネになります。つまり、関係が良好な間は良いのですが、辞めたりすると無理やり働かされたという主張になり、実際に元課長級の方が5年越しで係争中も含めて30件近い裁判を抱えています。私は気がつけば被告の親玉になっていました。

ガーナよさこい & 原宿スーパーよさこい

金澤由里(55回生)

昨年10月9日土曜日、椰子の木の先に広がる海を眺めながら、高級ホテルのラウンジで私達はよさこい踊りを練習していた。

ほとんどが初めての即席チーム。やつとアフリカの大地に着陸した時、窓の外を見て「高知と変わらんねえ。」と言った土佐人達である。

ひととおり格好がついてから、高級山羊ハンバーガーと地元産ギネスビールの昼食をとり、チルドレンズパークへ集合時刻は過ぎていた。アフリカ時間ならぬ土佐時間。列を作っている子供達の前に割り込み、列を乱しながら出番を待った。

感じたことのない光と色、風と香りが私を包んでいた。そして流れる「よつちよれよ、よつちよれよ。高知の城下に来てみや。高知の正調よさこい。その何気ない融合に私は感動してしまった。自分達の演舞後は、子供達に目が釘付けになり、あふれる涙を止めることができなかった。同じ音楽で、どうしてあれほどうまく踊れるのか。彼らの中

にもそれぞれ個性があることがわかる。暑さと緊張で倒れてしまう子もいる。従順な子もいればやんちゃもいる。そして皆日本語で「よさこい。よさこい。」と歌う。意味を聞かれて、「すばらしい未来が来ますように！」と教えてしまった。

今年8月28日日曜日、熟年少女の愛称で麗しい37回中村裕子先輩と55回の田口祥子と私と、原宿よさこいデビューをした。先輩には負けたくないと思つたし、同級の祥子ちゃんも圧倒的に練習量が少なかった。しかし、結果は私の惨敗。写真を見れば一目瞭然。宮地会長(21回)は「なかなかきまっていますよ。」と慰めてくれたが、岩村顧問(41回)には「こたまき下ろされた。それでも私は誇らしい。」

「ロツテ・ガーナよさこい連」は表参道のトップを切つて踊った。ガーナの中高校生、都立高校生、国際ボランティアの大学生、在日ガーナ人達に交じって私達もそこにいた。浅井前大使(35回)が、大使のご主人(30回)が、初来日のガーナよさこい演出家が、随行してくれていた。支援会の中田先輩(35回)の声で地方

車の上で響いた。公文先輩(35回)が国旗を振った。中村、篠原、杉本、中平先輩(35回)が惜しみない声援を送ってくれた。

ガーナから一行が到着したのは一週間前。誰もこの日を無事に迎えられるとは思っていなかった。やる気のおきな生徒達に「全国TV中継放送される。君達はガーナ代表」と鼓舞した。昼食はロツテリアバーガー。夕方のステージが終わる頃には、皆もつと踊りたくなっていた。そろそろガーナよさこいの季節が来る。あの時の仲間が今頃アクラでよさこいを踊っているに違いない。



第9回土佐高ハイクの会 会津磐梯山の旅 高田谷津(38回)

今回の土佐ハイクの会は日本百名山の一つ会津磐梯山と神秘的な色で人々を魅了すると言われる五色沼のトレッキングである。どんなドラマが待ち受けているのか自然と人間の織り成す感動のドラマが今ここに始まるのです。

いざ出発

7月16日(土) 7時30分
新宿西口を出発したとたん、早くも雲行きが怪しくなってきた。今回の幹事の三宅君(38回)「大丈夫、ゴマを焚いて晴れるように祈ってきたきに。」誰かが「それがいくか、ゴマはするもんだ。」山登りのベテランの中島君(38回)が「あんまり飲むなよ、今回もシヨイけんど、チョットきついかもしれん。」意味不明だが、要は飲むなとゆうことらしい。まあいつものことながらワイワイガヤガヤ。バスは一路、八方台登山口へ。

八方台登山口で恒例のごとく市内観光の丘組と山組に別れる。丘組には今回妻と共に行動したいと森さん(23回)夫婦、是非とも野口英世記念館を見たいと浜田佐和子さん(32回)、今回幹事に強引に誘われたという幸徳先輩(37

回)、富士山でもう山は懲りたと永野博子さん(38回)、わが道を行くでもう大分飲んでる弘瀬君(38回)、そして今まで先頭をきって山に登っていた西内君(38回)が兄貴の日本城郭協会の影響か、会津若松鶴ヶ城を見たいとゆう、何処か悪いのかしら。以上7名をバスに残していよいよ出発だ。

登山開始

登山口の看板に、ハッキリと「ここはハイキングではありませぬ、あくまで登山です」。私も土佐ハイクの会である。何か不吉な予感。でも「ままよ」と出発。

「シヨイ、どうってことない。」と、わたくし先頭で中の湯に僅か20分到着。ところがギツチョン、シヨイのはそこまで、中の湯から弘法清水まで1時間10分と地図には書いてあるが、きついてもきつい、深い樹林の中を登っていくのだが吐き気はするは目まいはするは、皆に少しづつ抜かれてとうとうビリケツ。展望の全くなり急斜面が続く。やはりハイキングではない、登山である。沢村君(38回)から杖を借りて登る。

10米歩いては休憩、5米登っては休憩。山の天候は変わりやすい、突然の雨だ。それに霧がガスか分らないが周囲が見えない。大久保圭子さん(38回)の言葉が頭をよぎる「私、今回ものすごく心配なのがやき。もし登山でバテたらそこで皆が降りてくるのを待ちよつたらええけんど、今回は反対側に降りるき、引返すこともできん」。

弘法清水から頂上まで30分そして降りてくるのに20分だそうである。しかしガスって何も見えない。山小屋のオバさんに聞くと「おそろく頂上に行っても同じでしょ。」しかし、皆は折角此処まで来たんだから登ろうということになった。私と中島君と中村さんのご主人の3人が後方支援部隊として岡部小屋にとどまることにした。

いつも降りるのが一番早い中村さん(37回)が「イヤ、富士山よりしんどかった。頂上は何も見えんし、遠くではカミナリが鳴るし、急いで降りてきた、タコ(筆者のあだな、行かんで良かったわ。)」それを聞いて救われた感じがした。「しかし中村先輩、富

士山に登ったのは9年前です、自然は変わらんが人は……」と言いかけたが、先輩の生き生きとした姿を見て止めた。

下山開始

4時過ぎ下山開始。暗くならない内に麓の猪苗代登山口に着く為には少し急がなければいけない。ところが赤埴山から1

合目の天の庭に至るまでの道が凄い岩の段差の下りである。若い時だと飛び降りることも出来ただろうにと思いつつ、杖を頼りに左右の足をギクシャクさせて一步一步進む。さすがの皆も押し黙ってほうほうの体で下る。

宮本先輩(37回)は「これがいい」と後ろ向きに歩く。金澤さん(55回)や岡野さん(70回)等は走った方が転ばなくていいと駆け下りていく。それに負けじと中村夫妻、橋田夫人、男性では久保先輩(37回)が続く。やっと登山口が見える景色のいい丘まで着いた。そこで私は後続組を待つことにした。その時の時刻は



18時20分だった。9名の下山が確認されていた。その後、三宅君と初めて参加の中田先輩（35回）が降りてきた。続いて元氣一杯颯爽と浜田先輩が通過する。19時をまわり始めたころ、宮本夫妻が「頼りになるのは自分ら夫婦だけぞね」とゆう感じで半信半疑で降りてきた。「こつちやったかね、道に迷うたかと思った、タコさん居てくれて良かったよ」これで後6名。「まだここに残るんだったら、貴方ペンライトを持っていたでしょう、渡してあげれば」と宮本夫人。宮本先輩が出世した理由はここにあったのかと一人で納得する。時刻は19時10分。

クマが居った!

全く誰も降りてくる気配がない。もしかして別ルートで降りたのではと急に不安になる。そうするしな^うまで静かだった藪が突然降って沸いたかのような虫の音と蚊蚊のうなり急いで携帯電話を中島君にするが全く通じない。しかたなく今度は三宅君の携帯に電話するが通じず、少し下った所から再度トライして通じた。だがよく聞こえない。「クマがどうのこうの……クマが……」何を言いかよく分

からん。俺はタコだ。三度目によりやく通じて「熊が出て永野先輩・橋田先輩と沢村君・岡田君の4人が立ち往生しているらしい。」私、今のいままで熊のことなど考えたこともなかった。その時、一人登って来る人が居る。私は目を疑った。なんと金澤由里さんではないか。「私迎えに行く」彼女は毅然として言った。さすが土佐高校同窓会関東支部事務局長、単なるはちきんじゃあない。その土佐高想いに感動した。

登ること15分。出会えたのです。ペンライト一つに6人が寄り添うように一団となつて。一人ピッコをひいている。「大丈夫ですか。」「イヤ、チョット足をつつただけよ。」「そうですか、ところで熊どうしましたか?」皆『ウム?……』いずれにしろペンライト1個に6人では時間もかかる筈だ。金澤さんが持って来たペンライトと宮本さんに借りたペンライト、3個の明かりが麓からどんなに見えたか想像にかたくない。猪苗代登山口に着いたのは20時45分だった。今では笑い話ですませるが、一時は「冬のアルプスで中高

年遭難か?」じゃなくて「夏の磐梯山で土佐ハイクの会熊に襲われる。」なんて新聞の見出しがよぎった。

実は、熊の正体は、少し前を降りていた大久保さんが後続組と余り離れてもまじい休憩をとった、彼女は寒く感じてカーデガンを羽織った、その色は黒っぽかった、時は黄昏、彼女はバックの中のペンライトをガサゴソと捜す。そのさまが上から見ると熊そっくりだったという訳だ。

エピソード

2日目は昨日と打って変わって快晴だ。五色沼に向かう途中、昨日降りてきた猪苗代登山口が見えた。「あんな高いところから、いやもつと奥の方から歩いてきたんだ。」足の痛いのをぐつと我慢して皆自画自賛しているようだった。土佐ハイクの会も来年は10回目の節目の大会になります。今年参加していただいた男性諸氏の最低年齢は60歳です。女性は70回の岡野(野町)さんと峯積さん、77回横井さんとヤングが多数参加しています。この会の伝統を受け継ぐ為にも来年は是非とも若い諸氏の勇気有る参加を期待したい。「自然はえいぞね……」

わが師の恩

第二十一回 堀昭吉

私が少しは漢詩を読んで愉しむことを識ったのは、もと国見米太郎先生による。四年間、十三から十六歳にわたって教えを享けながら、しかし、私が先生について知る所はほとんどない。

昭和十七・八年頃であったか、私立土佐中学から南東に斜めに延びた道を数分、まだタンポの拡がる春野町の外れに新居をかまえられた。その御宅に二度ほど伺ったことがある。

中年を過ぎて結婚され、御養子を迎えられていた先生は、道から少し低いお宅を出て、奥様が抱かれた幼い御子の頬を人差指でくぼませながら迎えて下さった。

白眼の所が充血したのを、私を介して眼科医で校医でもあった父に尋ねられ、「抛っておけば自然に癒ります。何も心配いりません。」という答えを携えたのだったと思うが、定かではない。

先生と私の間の私的な繋りの記憶はそれだけである。漢文を教えて頂くようになつてしばらく経つてから、多分中学三年の晩春の頃、詩經の

一節を講じられた。薄墨色の表紙だったと記憶する漢文副読本のはじめに選ばれていたのは、小雅合風の什(じゅう)から。

寥寥たるもの我
我に匪伊伊(こ)れ蒿
哀哀たる父母
我を生んで劬勞す

(以下略)

先生がどのような内容のお話をなさったか、父母の恩について説かれたかなどは何も覚えていない。思い浮かぶのは、熱をこめ、真剣に講じられていたことだけである。

受験中学の一学年一学級三十人の小賢しい少年達に先生が示そうとなさっていたのは何であつたのだろう。

もう一つは易経についての講義の時、教壇に筮竹(せいちく)と算木(さんぎ)を置き、卜筮(ぼくぜい)の実演をなさつたのが強い印象に残っている。

東洋大で学ばれたものと後に聞いた。(ただし八十年記念誌によれば文化学院を出られたとなつている。)

さらに、やや進んで教えを受けた中に、屈原の「漁夫」があった。

屈原既に放たれて、
江潭に遊び、
行くゆく澤畔に吟ず。
顔色憔悴し

形容枯槁せり

(中略)

屈原曰く、吾、之を聞く
新たに沐する者は必ず冠を
弾き

新たに浴する者は必ず衣を
振うと

いづくぞ能く身の察察たる
を以て、
物の紋紋たる者を受けん乎

(中略)

漁父莞爾として笑い

枻(えい)を鼓して去る

乃ち歌つて曰く

滄浪の水清まば、

以つて吾が纓(えい)を濯
うべし

滄浪の水濁らば、

以つて吾が足を濯うべし

遂に去つて復た與(とも)
に言わず

並んで「離騷」や「天問」
なども教えていただいたので
はなかつたろうか。

我々に二年生まで習字を教

えられたのも先生であり、軍
国主義化にもなつて、緑黄
土の国防色などというものに
変わつてきていた制服の胸に
名札をつけるようになったは
じめの時、全校生徒に姓を書
いて下さつた。

達筆ではないが整つた読み
やすい字を書いた父は、名札
の字を見て「久しくこんな
佳い(堀)という字は見なかつ
た。」と感嘆し、人差指で何
度もなぞつていた。

同じ国漢を担当した名物先
生樋口一治グッチャン先生に
かくれ、派手さは何もなかつ
たけれども、長い手足をゆつ
くり四分の一テンポおくらせ
て運ばれるお姿に似ず、中に
骨っぽい節操を持しておられ
たと、今になって感ずるもの
がある。それが五十余年を経
て隣の大きな古い国の詩文と
書に親しませてくれる。

終わりに、教えていただい
た後に知り、愛唱し、時に吟
ずるようになった章句の中の
短いもの十三篇を録し以て師
恩を偲ぶ。

杜甫

人生不相見

動如參與商

今夕復何夕

共此燈燭光
少壯能幾時
鬢髮各已蒼
訪舊半為鬼
驚呼熱中腸

(中略)

主稱會面難

一舉累十觴

十觴亦不醉

感子故意長

明日隔山岳

世事兩茫茫

(人生相見ず)

(動もすれば參と商のごと
し)

(今夕は復た何の夕べぞ)

(此の燈燭の光を共にす)

(少壯能く幾時ぞ)

(鬢髮各己に蒼し)

(舊を訪へば半はは鬼と為る)

(驚呼して中腸熱す)

(中略)

(主は稱す會面は難しと)

(一舉十觴を累ぬ)

(十觴も亦た酔はず)

(子が故意の長きに感ず)

(明日山岳を隔てなば)

(世事兩つながら茫茫たらん)

薛稷

客心驚落木

夜坐聽秋風

朝日看容鬢

生涯在鏡中

(客心落木に驚き)

(夜坐秋風を聴く)

(朝日容鬢を看れば)

(生涯鏡中に在り)

李白

玉階生白露

夜久侵羅襪

却下水精簾

玲瓏望秋月

(玉階に白露生じ)

(夜久しくして羅襪を侵す)

(却下す水精の簾)

(玲瓏秋月を望む)

蘇軾

梨花淡白柳清青

柳絮飛時花滿城

惆悵東欄一株雪

人生看得幾清明

(梨花は淡白にして柳は清青)

(柳絮の飛ぶ時花城に満つ)

(惆悵す東欄一株の雪)

(人生 幾たびの清明を看得
ん)

王維

秋山斂餘照

飛鳥逐前侶

彩翠時分明

夕嵐無處所

(秋山餘照を斂め)

(飛鳥前侶を逐う)

(彩翠時に分明)

(夕嵐處所無し)

涼州詞

王翰

葡萄美酒夜光杯

欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑

古來征戰幾人回

(葡萄の美酒夜光の杯)

(飲まんと欲して琵琶馬上に
催す)

(酔ひて沙場に臥す君笑ふ莫
れ)

(古來征戰幾人か回る)

涼州詞

王之渙

黃河遠上白雲間

一片孤城萬仞山

羌笛何須怨楊柳

春風不度玉門關

(黃河遠く上る白雲の間)

(一片の孤城萬仞の山)

(羌笛何ぞ須ゐん楊柳を怨む
を)

東天と南南西の空きわ。

(春光度らず玉門開)

題慈恩塔

荊叔

漢國山河在
秦陵草樹深
暮雲千里色
無處不傷心

(漢國山河在り)

(秦陵草樹深し)

(暮雲千里の色)

(處として心を傷ましめざるは無し)

三月晦日題慈恩寺

白居易

慈恩春色今朝盡
盡日徘徊倚寺門
惆悵春歸留不得
紫藤花下漸黃昏

(慈恩の春色今朝盡く)

(盡日徘徊して寺門に倚る)

(惆悵す春歸つて留むれども得ず)

(紫藤の花の下に漸く黃昏)

金銅仙人辭漢歌

李賀

茂陵劉郎秋風客
夜聞馬嘶曉無跡
畫欄桂樹懸秋香
三十六宮土花碧

(茂陵の劉郎秋風の客)

(夜馬の嘶くを聞き曉に跡無し)

(畫欄桂樹秋香を懸け)

宿建德江

孟浩然

移舟泊烟渚
日暮客愁新
野曠天低樹
江清月近人

(舟を移して烟渚に泊す)

(日暮客愁新たなり)

(野は曠くして天樹に低れ)

江陵秋望寄魚玄機

魚玄機

楓葉千枝復萬枝
江橋掩映暮帆遲
憶君心似西江水
日夜東流無歇時

(楓葉千枝復た萬枝)

(江橋に掩映して暮帆遅し)

(憶う君が心は西江の水に似たるを)

(日夜東流歎む時なし)

薤露

無名氏

薤上露
何易晞
露晞明朝更復落
人死一去何時歸

(薤上の露)

(何ぞ晞き易き)

(露晞けば明朝更に復た落つ)

(人死して一たび去れば何れの時にか歸らん)

舍監として長く寄宿舎に起居なさった先生については、舎生であつたどなたかが述べて下されば嬉しいと思ふ。

季節のふるさとの味
土佐酒蔵

銀座7-1-2-4 友野本社ビルB1
電3545-3855 銀座第一ホテル通り

第12回 はちきん会

平成17年10月27日(木) 白金台八芳園にて第12回目はちきん会が開催されました。久しぶりのはちきん会で、92名という史上最大の出席者でした。

今回のナイトは33回生の澤村良節、千原望、鍋島和夫の三氏で、スペシャルゲストとして高知から古谷俊夫先生、池上校長先生(28回)、岡村甫高知工科大学学長(32回)にいらしていただきました。はちきん会永久幹事の佐々木泰子さん(33回)の双子の愛娘のデュエット「たまりの」の特別出演コンサートもあり、その清純な歌声とおいしいディナーを皆さんで堪能いたしました。毎回熱心に幹事をつとめてくれる上野典子さん(51回)、佐藤さとさん(57回)、ほんとはに苦勞様でした。

仁後雅子(34回生) はちきん会とコンサートありがとうございました。たまりのさんのデュオはとても楽しくすてきでした。白金台で勤務している娘と孫を連れてくればよかったですと残念でした。

〔編集部記〕

この次は是非にと願っています。
山下通子(53回生)

憧れのはちきん会にやっと参加できました。会場に入るとそこは懐かしの土佐の国。駆けつけ三杯を手酌である先輩を見て「これぞはちきん、カッコイイ!」と心で叫び、美味しい料理と、「たまりの」ちゃんの美しい歌声に酔いしれた夜でした。準備を下された方々と、ナイトに感謝しつつ、もう次の開催を心待ちにしています。

岡村甫(32回生)
(高知工科大学学長)

高知工科大学の開学記念日



11月7日は、二〇〇一年より3年間にわたって、世界的に活躍されているピアニスト「クララ・チエコ」さんのピアノ演奏が売物でした。クララさんは米国での佐々木泰子さんのお知り合いで、「たまりの」姉妹が米国に留学されていたときの縁だと想像しています。

今回「はちきん会」へのお招きをいただき、佐々木さんのお元氣になられた姿とこの目で見たく、また、ハチキンの皆様にお目にかかりたく、喜んで参加させていただきました。



まず、ハチキンの皆様のお予想通りの元氣さと楽しい雰囲気、に酔いました。そして、「たまりの」姉妹の澄んだ美しい声とすべての人を魅



了する微笑と動きに時間の経つのを忘れました。本当に楽しい機会を与えていただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

最後に、高知工科大学は関東周辺の生徒たちが青春を過ごすに価するレベルに達しており、今後も一層努力していく覚悟であることをお伝えして、つたない本文のしめくくりとさせていただきます。

浅井和子(35回生)
(前駐ガーナ特命全權大使)



秋雨もあがつてしっとりとした夕闇の庭を眺めながら、今年



「はちきん会」は八芳園の一室で始まりました。思えば3年半ほど前、私のガーナ大使就任が公表された日の夜もやはり「はちきん会」でした。ご就任間もない土佐校の池上校長が出席されていてフレッシュなお姿でしたが、今年ご出席の校長先生は、さすがに貫禄をつけておられました。

3年弱過ぎたガーナは年がら年中夏で、同じ南国人同士のせい、か、ガーナ人とはウマが合い、「日本生まれのガーナ人」とまで言われておりました。これもひとえに土佐の血をばっちり受け継いでいるお陰や、と思っておりましたところ、どういうルートか分りませんが、「5分でわかる十佐辞典、スーパーはちきん」というチラシがガーナまで流れてきました。スーパーはちきんとは、「色黒、蚊に刺されやすい」から始って、「血色がえい」「内股を歩かない」

「前世は絶対男であった」「けんど、あたしは。(意見を言う)」「男友達が多い」「亭主の替わりはいくらでもおると思っている」「ダンナの手におえないヨメサン」「ごちやごちや言うやったら、あたしがやつちやらあえ」云々と35項目。さて私には何個あてはまるでしょうかとある。私はそのチラシを読みながら「いや、おちゆうく、これもおちゆうく」の連発で、35項目中1個「キレイタイプでスツピン顔」を除き、あと全部「おちゆうく」。こりゃ、私はスーパーはちきんや、と思いました。

ガーナから帰国し、何もかも浦島太郎になった私は今年のはちきん会に出席し、33回生の佐々木泰子様にお目にか



かりました。彼女こそは「スーパーはちきんの女王」です。彼女は今年、第12回と言われる「はちきん会」を最初からずっとお世話下さっただけでなく、最近まで重い病氣に罹られ、幾度となく襲う厳しい苦しみを耐えに耐えて、見事に乗り越えられたのですから。苦しい時、困難な時こそ、はちきんの「芯がすわちゆう」本領が発揮されると思います。佐々木様には心からの敬服とお喜びを申し上げます。そして彼女への何よりの祝福は、その夜、美しいデュエットを聞かせて下さった、それはそれは可愛い、清楚な双子のお嬢さま達でしょう。珠乃ちゃん、梨乃ちゃんの「たまりの」ちゃん

の歌う「赤とんぼ/Amezining Graceel」や「ふるやう」、

「君は愛されるために生まれた」などを聞きながら、会場はみな幸せなやさしい雰囲気になりました。ありがとうございました。



★出版レーダー★

倉橋由美子(29回)

「星の王子さま(新訳)」(翻訳)

宝島社 一五七五円 2005. 07

「偏愛文学館」

講談社 一六八〇円 2005. 06

塩田潮(40回)

「出処進退の研究」

PHP研究所 一七八五円 2005. 07

田島征三(34回)

「憲法を変えて戦争へ行こう、という世の中にしたため
の18人の発言」

岩波書店 五〇〇円 2005. 08

西村繁男(40回)

「An Illustrated History of Japan」

C. E. Tuttle 一一〇〇円 2005. 05

野田正彰(27回)

「災害救援の視点」

関西学院大学出版会 七三三五円 2005. 09

「対論・日本のマスメディアと私たち」

晃洋書房 一八九〇円 2005. 09

「なぜ怒らないのか」

みすず書房 一一二〇円 2005. 09

坂東真砂子(51回)

「With you」

幻冬舎 五六〇円 2005. 08

森岡浩(55回)

「名字の新聞」

宝島社 六三〇円 2005. 09

「高校野球がまごころわかる事典」

日本実業出版社 一五七五円 2005. 07

森岡正博(52回)

「生命学をひらへ」

トランスビュー 一六八〇円 2005. 07

「」からは雑誌に掲載されています

大橋一章(36回)

「X線CTスキャン法が新しい文化財保存・修復を拓く」

仁学 60(7) 38-40 2005

公文俊平(28回)

「展望 あなたはへ3度目の上昇期を担う「智民」たりえるか」

Sapio 17(15) 8-10 2005

倉橋由美子(29回)

「倉橋由美子 未発表短篇(無題)」

新潮 102(8) 219-223 2005

塩田潮(40回)

「ブックレビュー Interview 著者に聞く『出処進退の研究』を書いたノンフィクション作家 塩田潮 首相の辞め方
には政治家の本質が表れる」

週刊東洋経済 5974 101 2005

「ブックレビュー 注目の1冊『メディア裏支配』田中良
紹著―誰も語らなかつた巨大メディアのタブーと聖域」

週刊東洋経済 5957 108 2005

「FOCUS政治 小泉ンナリオ第2幕、歴代総理の失敗を反
面教師にした小泉首相」

週刊東洋経済 5973 124-125 2005

「FOCUS政治 政権占う都議選結果 課題は求心力の確立」

週刊東洋経済 5967 114-115 2005

「FOCUS政治 天王山を迎える郵政民営化法案 故竹下の遺
志継ぐ・キーマン・青木の出方」

週刊東洋経済 5960 120-121 2005

「FOCUS政治 議院内閣制下では異例「二つの民意」の衝突
 壮大な茶番劇? 政府と与党の対立」

週刊東洋経済 5951 108-109 2005

「特別研究「退き際」にみる政治家の本質と人間性 小泉
首相はいつどんな形で辞めるのか」

ニューリーダー 18(7) 8-12 2005

「吉田茂と宿毛」

文芸春秋 83(9) 88-90 2005

「キーバソンが語る激動の90年代 金融と政治下」相沢
英之・江田憲司 財政・金融分離を巡る政と官の攻防」

金融ビジネス 242 86-89 2005

「島田裕之(33回)
「筋力増強運動による介護予防・リハビリテーション効果」
理学療法ジャーナル 39(7) 601-607 2005

「竹内靖雄(29回)
「特集2 ビジネスマンの必須知識! 「ゲーム理論」で考
える交渉と営業の戦略」
Business data 20 50-56 2005

「野田正彰(37回)
「JR西日本事故 惨事はなぜ起こったのか―検証・尼
崎列車脱線事故」
世界 741 54-63 2005

「宮岡等(49回)
「身体表現性障害の概要」
日本医師会雑誌 134(2) 170-175 2005

「森岡正博(52回)
「座談会・ロリコン教授の告白をめぐって大激論「感
じない男」の悲哀を女は理解できるか」
婦人公論 90(17) 138-141 2005

「痛みに向きあい、後悔なく生やせ」
第二文明 548 68-70 2005

「杉山雄一(41回生)
「オーバービュー:薬物トランスポーターの分子多様性、
組織特異性、遺伝子多型」
日本薬理学雑誌 125(4) 178-184 2005



「ふたりしずか」

山岸雅恵・鍋島寿美枝

四六判316頁

本体価格¥1500

05年8月高知新聞企業発行

生まれてすぐに妹が叔母の家にもらわれ、実の姉妹でありながら「よく似た従姉妹」として育てられた双子の姉妹の随筆である。

大人になって事実を知った時「私は腹を立てた。双子だということではない。二十年も私を騙し通してきた親に対してである」と姉は書き、妹は「父の辛そうな表情に胸が詰まり、ひっそりと涙を流す母の背後で一緒に泣いた」。

この双子の父親が土佐中・高校の名物教師「オンカン」こと故中山駿馬先生である。独特のユーモアで教室を湧かせたオンカンの家庭での素顔や苦悩などが実の娘の口から語られる。

「従姉妹同士」として育った二人がある日突然「姉妹」となったのだ。互いに複雑な思いを抱いてきたことは想像に難くない。本書は長い年月を経てようやく二人が真実の姉妹愛を確認しあつた証しともなるだろう。宿命を背負った親と娘の愛情の交錯が、澄んだ文体で描かれていて、その際だった文才には驚くばかりだ。

ほかに戦時中の疎開の辛い体験、花や鳥など身近な生き物に寄せる慈しみの心、夫や娘の早すぎる死など二つの家族にまつわるさまざまな話が収められている。読者は姉妹の愛情溢れた眼差しに感銘を受けるに違いない。

姉の雅恵さんは土佐高30回生である。68年に第一回小説ジュニア新人賞、05年第30回高知県短詩型文学賞。妹の寿美枝さんは92年第一回大原富枝賞、02年第47回高知県出版文化賞を受賞。書名の「ふたりしずか」は、センリョウ科の野花。二本の花穂の先に米粒のような白い清楚な花をつけるという。

(41回生 岩村康生)